第8回 実践場面を科学する―こんな時どうする？Ⅴ
～ⅠからⅤを子どもから見てみたら～

講師　　岡村　由紀子　氏

１　はじめに

なぜ幼稚園や保育所があるのでしょう。それは、人間は人間の中でしか育たないからです。幼稚園や保育所は効率よく指導する場ではなく、人が集まることで生まれる教育力を使い、子どもが育つ場です。

そんな中、みんなで楽しむことが苦手で、一人で遊んでいる子どもがいます。一人で遊んでいる子どもの側から見て、どのような集団であれば、その子が集団に近づいてくるのでしょうか。研究でわかってきたのは、４つの時期があるということです。

２　子どもが集団に近づく集団の質

（１）１期『くるまブイーンは、おもしろい』

あきら君（3 歳児）は車で遊ぶことが大好きで、遊び始めると他の遊びに関心を持つことが難しい子です。一人で遊んでいたあきら君に保育者は、「あきら君、何してる？」と聞きます。あきら君は「くるまブイーン」と言います。車を走らせているということを伝えたかったのでしょう。

一人で遊んでいる子への指導の入り方は、その子と同じことをやるのが一番です。しかし集団ですので、ずっと一対一で関わることはできません。一対一で付きつつ、周りにいる子どもたちとどう繋げていくかを常に考えます。秋田喜代美氏は、「集団の中で、ほんのちょっとの時間でも個を大事にしようとする姿勢が専門性の一つ」だと言います。

子どもは、保育者がやっていることに対してのアンテナが高いので、「何してる？」と寄ってきます。保育者が、「あきら君と車を動かして遊んでいるんだ。」と伝えると K ちゃんも「やりたい。」と言います。あきら君は「これならいいよ。」と言って、車を貸してくれます。車を貸すことが嫌だと言う時には、保育者の車を貸して一緒に遊びます。決して一人ぼっちにさせません。保育者は仲立ちをします。

そして保育者は、「こちらは積木の街です。」と言いながら、他の子どもたちのところに行きます。するとその子どもたちも「ここは、ガソリンスタンドです。」と言って遊びを広げていきます。つまりこの時期は、『個の遊びの充実期』で、“一人で遊んでいる、困った”とは考えません。集団の中で母親から離れても泣かずに遊べることに意義があります。自分のやっている遊びを否定されない経験、保育者と一緒に遊んだという経験が大事なのです。

（２）２期『すなあそびは、おもしろくてたまらない』

さとし君は砂遊びが大好きです。ゆうた君は、砂場でさとし君に出会い、よく遊びます。この日は午後、健康診断がありました。保育者は、遊んでいる子どもたちに、いつ声をかけるかを考えます。「次に声をかけたら、今日は続きにしてね。お昼を食べたら病院の先生が体の中に悪い病気はないかなって診てくれるから。お昼を早く食べるので片づけてね。」と言うとだいたいの子がわかります。片づけ始める子どもたちがいる中で、さとし君とゆうた君はまだ砂遊びをしています。

そこで保育者は、二人に「今何つくってるの？」と聞きます。「片づけって言ってるでしょ。」と言うのではなく、現状や続きにできる条件の確認をしてからお昼の提案をします。「川。水流す。」「そうだよ。」と言う二人に保育者は、「すごいねえ、何をつ

くったら続きにできる？」と聞きます。ゆうた君は「あとここに水流したら。」と言えるので、片付けができそうです。さとし君は何も言いません。そこで保育者が「じゃあ水を流してお昼にしよう。」と提案するとゆうた君は「うん。」と返事。しかし、さとし君は返事がありません。５分後、ゆうた君は「できたー。」と言いながら部屋に入ってきましたが、さとし君の姿はありません。「さとし君はまだやってるよ。」とゆうた君が言うので、保育者は「そうかー。楽しいんだね。でも病院の先生がみえるから聞いてくるね。みんな、お昼のしたくできる？」と聞きます。この時期になると自立してきますので、保育者は子どもを信頼してさとし君のところに行くことができます。

保育者はさとし君のもとに行き声をかけますが、彼は動きません。「先に食べてるよ。」と彼に伝えると「いい。」と言うのです。ここで保育室に戻ったら、保育ではありません。さとし君に行動を切り替えてもらわなくてはなりません。そこで保育者は、「わかった。でもね、お昼食べたら体の中に悪い病気がないかなって調べてもらうんだよ。みんなは調べてもらうからいいけど、さとし君は一人で病院に行ってくれる？」と聞きます。するとさとし君は、「えー？いやー。先生と行く。」と言います。私は「残念だけど、後だと仕事がいっぱいで、行ってあげたいけど行けないんだよ。ごめんね。」と言います。すると彼は、「じゃあやめる。」と言いました。

なぜ私の言葉が彼に落ちたかというと、私とさとし君の間には、信頼関係が成立しているからです。長い時間を費やして、自分で折り合いをつける指導をしてきたことで、彼は折り合いをつけられるようになったのです。だから、「じゃあ続きにする？」と言うと、「うん。」と嬉しそうに答えたのです。

部屋に戻り、さとし君のことをクラスのみんなに話すと、「やるやる。」「またやろう。」という声。さとし君は一人で遊んでいたにも関わらず、おもしろいことには周りの子が集まってくるのです。

２期は『興味のあること、遊び、人に関心を持つ時期』です。散歩、虫取り、絵を描くなど興味のある活動を他者と共有することを嫌がらない。気に入った友達と“一緒”を共有するなど人と一緒が楽しいと感じたり、一緒を楽しんだりする姿があります。

１期との違いは、自己充実を誰かと共有できることです。“一緒”を共有する時、一緒が楽しいということを学びます。強制された集団の中で一緒が楽しいということを言っているのではありません。個の遊びにこだわりながらも、クラスがわかり、所属しようとすることもあります。集団と違う遊びをしていることを「いけないこと」と捉えるのではなく、個にも集団にも伝え合い、「違ったことをしていてもクラスの仲間だね」という関係を創るのです。だから、さとし君が保育室に戻ってきた時、クラスのみんなから批判的な言葉はありませんでした。

違っていることを認めるというインクルーシブ教育が今の世界や国の流れです。これは言葉ではなく、自分が大事にされた経験を通して、子どもの中に形成されていきます。

（３）３期『ごはんをたべたら　はいります』

あゆむ君（４歳児）は、自分のイメージで楽しく遊ぶことが多い子ですが、保育者が繋ぐと仲間との関わりの中で、ごっこ遊びをする姿が見られます。

朝から日差しがとても暑い中、あゆむ君は一人、部屋でお料理づくりをしています。保育者は、「暑いねー。友達はプールに入る支度をしているけれど、どうする？」と声をかけます。すると「ぼくはいいんです。ごはんをたべたら入ります。」ときっぱり返事。そこで保育者は、「わかった。できたらご馳走してくれる？」と、あゆむ君の世界に共感します。彼は「うん。」と言って、お料理づくりに夢中です。保育者は、あゆむ君の様子を子どもに伝え、あゆむ君の姿が見えるところで、プール遊びをします。こ

こが指導のポイントです。

保育者は時々「ご馳走はできましたか？」と聞きにいきます。あゆむ君は、「まだですよ。カレーをつくっています。サラダもつくります。」と返します。その言葉を、プールに入っている子どもたちにも伝え、「後でご馳走してもらう？」と聞きます。すると「うん。」「いいねー。」の声が返ってきます。情報をきちんと伝え、楽しさを共有していきます。

プールに入っている子どもは、あゆむ君が何をしているかがわかり、あゆむ君はプールから出てきた友達が自分にご馳走してもらうつもりでいるとわかっています。だからあゆむ君はプールから出てきた友達に、「これはおいしいカレーです。」「サラダもありますよ。」と声をかけるのです。急いで着替えてきた子どもは、「仲間に入れて。」と言って、お料理づくりを始めました。その後、お寿司やデザートもつくり、他のクラスや保育者にも配達します。あゆむ君の始めたお料理づくりで、遊びがさらに広がったのです。

そしてお昼の時、あゆむ君は「みんなー、お昼を食べたらプールに入るよー。」と宣言します。すると、「ぼくも入る。」「早く入ろう。」の声が上がり、お昼の後、みんなでプール遊びが始まりました。

３期は、『集団の遊びや活動と、個の充実に自分で折り合いをつける時期』です。好きな遊び、好きな人たちとの一緒が楽しいという心が育つことで、続きにする、これをやったらやるなど、自分の中で折り合いをつけていきます。「お昼を食べたら入ります」これが自己コントロールです。乳幼児期に大人が決めた「この時までにこれをしなさい」ではなく、生活の中で自分で切り替える経験がどの子にも必要です。３歳児や４歳児はまだ自己コントロールの形成が十分ではありません。その時期に自分で切り替えることができないのは、通常の発達です。それが４歳児くらいになると、「これをしたら、これをする」ということができるようになってきます。

（４）４期『わたしは　２ばんだった』

卒園式３日前のこと。子どもたちは卒園式で「側転をやろう」と決め、部屋で練習をしていました。

１番はまゆこちゃん、2 番はひかちゃん、3 番はけいちゃん、4 番はなごむ君です。1 回目、2 回目が終わり、3 回目になってまゆこちゃんがやると、けいちゃんが困ったような顔をして、その場に立ちすくんでしまいました。その前で、ひかちゃんが「私は 2 番だった。」と言います。すると、なごむ君が「違う。2 番目はけいちゃんだった。」と言います。ひかちゃんは大きな声で泣いてしまいました。私はどうなるのかなと思って見ていました。すると、ひかちゃんが「じゃあいいよ。ジャンケンにしよう。」と言ったのです。ひかちゃんは泣きやみ、何も言わないけいちゃんとジャンケンをして、けいちゃんが勝ちました。ひかちゃんはまた怒って泣き始めました。自分がジャンケンに勝つと思っていたのです。

その姿を見たなごむ君は、「ジャンケンに負けたのだから仕方ないよ。」と言い、周りの子どもも「自分でジャンケンて言ったでしょ。」と言います。その声にひかちゃんは、ますます大声で泣きます。

その後、話し合いが始まりました。卒園式３日前でしたが、私はこの日を待っていました。なぜかというと、ひかちゃんはこのようなことが多く、なごむ君は、どちらかというとひかちゃんが苦手で、きつくあたることがあり、一方で、けいちゃんには優しく接していました。そのような関係を感じていましたので、私はこれは間違っている、卒園前にもう一度学ぶことが必要だと考えていたのです。

なごむ君は、絶対にけいちゃんが 2 番だと言います。私は、「ひかちゃんは、まゆこちゃんの後ろで 2 番だったと思う。」と言うと、なごむ君は、「違う。けいちゃんが 2 番。」と言います。さらに私が「けいちゃんはどうだったの？」と聞くと、けいちゃんは何も言いません。だから「本当のことを言うのがたいよう組さんだよ。本当のことを言うのは勇

気がいるよね。まゆこちゃの後ろは誰だった？」と聞きます。するとまゆこちゃんは、「けいちゃん。」と言ったのです。ひかちゃんは「違うもん。私が2番だもん。」と言います。「2 番。」「違う。」とやり取りが続いた後、誰かが「ひかちゃんは本を読んでいた。」と言いました。私がひかちゃんに、「そうなの？」と聞くと「うん。エルマーの本。でも2番だもん。」と言います。すると子どもは「え？今、そんな時じゃない。」「そうだよ。今は側転の練習をする時だよ。」と言います。またひかちゃんが泣き出し、「だってここだもん。」と言って、列の横にあった机を指したので、「その通りに並んでみよう。」と言って並びました。たしかにひかちゃんは、列の横にあった机のところにいて、列の 2 番がけいちゃんだったのです。

ここでいつもおとなしい子が、「そういう時は、ひかちゃんを呼んであげればいいんだよ。」と言いました。私はけいちゃんに、「けいちゃんは、そのことを知っていたの？」と聞くと、「だって、みんながけいが2番2番て言うから…。」と泣き出してしまいました。ここは、集団の力です。子どもたちは「そういう時は勇気を持って言うんだよ。」「ひかちゃんも、ここのところとっておいて、とか言うといいよ。」と口々に言います。私は、「そうかあ。思っていることを友達にわかるように伝えるのは難しいね。」と話しました。

４期は、『集団の遊びと個の遊びが絡み、仲間の要求で折り合いをつけ、豊かな遊びが展開する時期』です。友達やクラスなどの大好きな人と一緒にいたいという気持ちが強くなり、自分の思いや考えを相手に伝えたい気持ちが生まれ、周りとのコミュニケーション、人間関係を創りたい気持ちが生まれます。仲間やクラスの要求を聞き、折り合いをつけて自己コントロール力がついてきます。

個と集団の要求を対等平等に受けとめ、話し合いをしていきます。トラブルの時こそ、集団の力が高まるチャンスなのです。

３　終わりに

私は改めて幼児期に育てたい力について考えました。楽しくおもしろい遊びの中には、「あぶないこと」「困ったこと」「失敗」「無駄」等、大人からすると「マイナス」と思われることがたくさん含まれています。しかし、その中で意欲、探求心、がんばる、悔しい、折り合いをつけるなど、人間として生きる力がたくさん育っていきます。それは、子どもの今を豊かにする世界があるばかりではなく、未来を切り開く力を内包しています。これらの姿を、大人の視点で「〇〇の力につながる、つながらない」と評価することはできません。なぜなら、活動の主人公は、子どもだからです。私たちは、その手助けをしているのに過ぎません。だから保育者は、いつも子どもの視点で考えることが求められます。幼児期に、日常の生活と遊びの中で仲間と繋がり、毎日が「あ～おもしろかった」と言えるように、様々な経験を通して「人間らしく生きていく力」を感性的土台として育てることが大切です。

今までの幼稚園や保育所の歴史は、子どもが主体であったと思います。ですから、幼稚園教育要領や保育所保育指針が変わっても、今まで皆さんがやってきた、子どもを大事にした保育そのものは変わることはありません。教育の目的は、人格の形成です。誰かのため、社会のためにではなく、生きていく時の主人公となる子どもを育てることが教育です。

乳幼児期は、非認知という“感”の時代です。つまりたくさんの経験を通して育ちます。子どもが水や砂、泥に触れ、体を思いきり動かして楽しい遊びを展開することが、発達に課題を持つ子も含めてとても大事なことだと思います。人間を育てるというのは、そういうことだと思います。

第８回 保育者資質向上研修会
平成 30 年２月７日
会場：焼津公民館